第３章　吉田構内ラグビー場防球ネット設置に伴う調査

１　調査の経過

当調査地点は、吉田構内の西寄りに位置するラグビー場の北東端の一辺にあたり、遺跡保存地区のすぐ北西、また昭和56年度に発掘調査が行なわれた教育学部講義棟の西隣りにあたる地域である。調査の契機となった防球ネット設置はラグビー場北東辺と南西辺の二カ所に計画されたものであるが、後者側については周辺における既往の調査結果並びに工事内容等を勘案するに埋蔵文化財に対する影響はないと推定されたことから、調査対象からは除外した。ただし、北東側は周辺での遺跡の埋蔵状況から察して遺物、遺構が遺存している蓋然性が非常に高いと考えられたため、昭和58年12月20日から年末までを予定として調査を開始した。しかし後述のごとく当初の予想以上に遺構、遺物を検出したためさらに延長して昭和59年１月19日まで実質約20日間にわたって発掘調査を行なった。

調査はまず防球ネットに伴う側溝の付設予定地の範囲に幅１ｍ、長さ90ｍのトレンチを設定し、さらに南西側に10ｍ間隔で接して設置される支柱基礎部分（北から順に第１～第11グリッド）についても前者のトレンチから張り出す形で調査区を設定した。発掘調査は、とくに側溝付設部分のトレンチに関して、工事掘削深度までの範囲を実施した結果、南半部で竪穴式住居跡１基、溝３条、土壙１基、柱穴等の多数の遺構が検出され、また遺構面が南から北へ向かって傾斜していることも明らかになった。ただし、北半部では遺構面が工事基底面よりもさらに下方に位置することが察せられるに及んで、工期の関係、かつ遺物包含層、遺構等が存在しても直接破壊されることはない点等を考え基底面以下の調査は控えた。なお、構内造成に伴う置土までは機械を使用して排除し、それ以下は手掘りによる分層発掘を行なった。

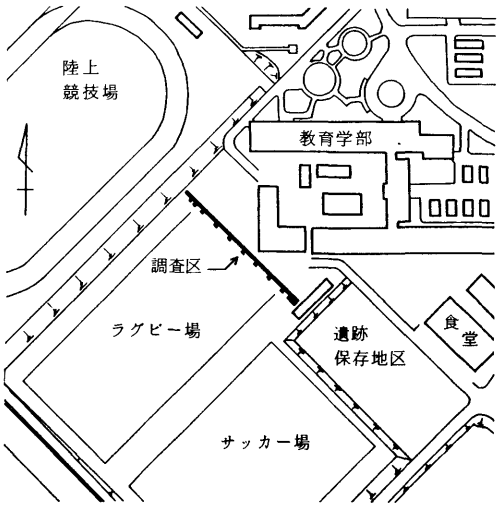


Fig.36　調査区位置図

2　層位

調査域の現地表面標高は概ね18.80ｍ前後である。現地表面から遺構面に至るまでの基本堆積層は第１層；真砂土、第２層；石炭殻、第３層；埋め土、第４層；暗褐色粘質土、第５層；褐色粘質土である。第１～第３層は大学統合移転時の造成に伴うもの。第４層は旧水田の耕作土であり、約10㎝程度の厚さで全体的に南東から北西に向ってゆるやかに傾斜する。第５層は水田の床土で、平均約10㎝の厚さで、やや南東側の方が厚い。第４層と同様、全体的に北西に向かって傾斜しているが、$y=360$付近から北側、少なくとも$y=350$付近まで褐色粘質土は認められない。地山（遺構面）は黄褐色粘質土ないし黄橙色粘質土で、南東側では砂礫混りになる。なお、住居跡付近の西壁断面には遺物包含層の堆積が認められるのに対し、東壁断面では全く見られないこと、およびトレンチ北西端付近では構内造成に伴う置土直下が地山（橙色砂礫混り粘質土）となっていることなどから、調査域内は後世において幾度か削平を受けているものと考える。

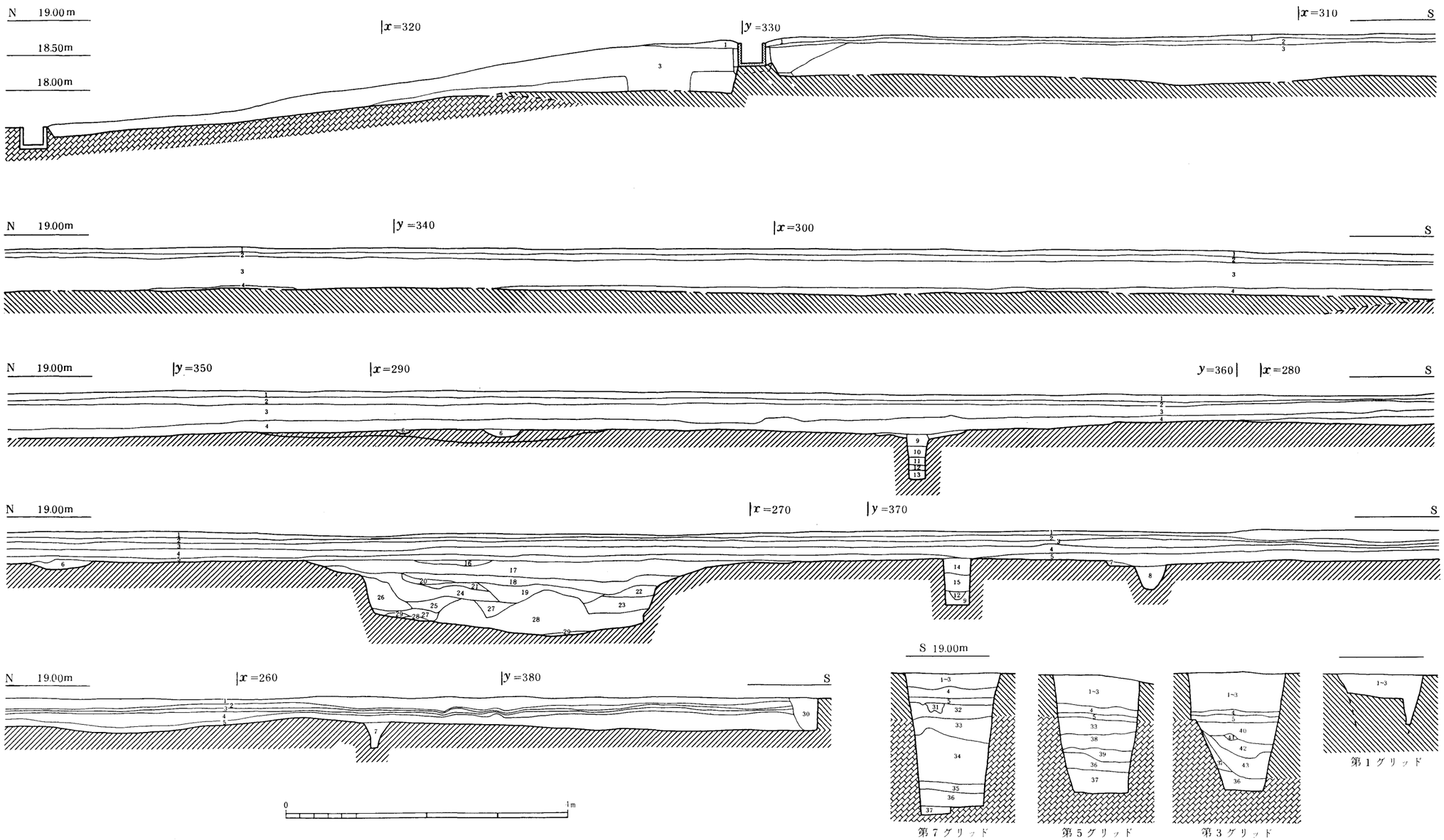
一方、支柱基礎グリッドでトレンチ北半部の旧地形把握および遺構面下の土層確認のための深掘りを行なった結果、第３グリッド、すなわち、$x=308$、$y=335$付近以西では後世に地山の削平が行なわれており、水田造営時に約80㎝の客土を行なって水田面を造出していることが判明した。

3　遺構

今回の調査で検出した遺構は竪穴式住居跡、溝、土壙、柱穴、暗渠等である。遺構の大半はトレンチ南半部で検出し、北半部分については遺構面まで掘削しておらず不明である。南半部に限って述べると、包含層のほとんど残存しないこと、また同一遺構面で埋土の異なる遺構が検出されることなどから、遺構の多くは後世多少なりとも上部が削平されていると察する。

(1)　竪穴式住居跡（Fig.39　PL.29～31）

トレンチ内南端に位置する。今回の調査範囲では全体プランの約３分の１程度を検出したに留まり、全体の規模等については把握していない。平面形態は隅丸方形になるものと推定されるもので、東辺4.45ｍ、現存壁高27～37㎝を測る。住居跡は包含層である第６・７層から掘り込んで造営されており、住居跡の埋土は西壁断面において第８～第11層である。壁溝は認められず、また住居跡内で柱穴が４個検出されたが、住居に伴うものかどうかは判然としない。埋土中からは多量の土器類が出土した。床面付着のものもあるが、多くは第８層の黒褐色粘質土に包含するものである。



層　位

- 地山面
- 未完掘面
- 遺構面

1 真砂土
2 炭　殻
3 構内造成時の置土
4 暗褐色粘質土（旧耕土）
5 褐色粘土質
6 暗茶褐色粘質土
7 暗黒褐色粘質土
8 明黒褐色粘質土
9 灰色土
10 黄褐色粘質土
11 砂　層
12 木　枝
13 灰色細砂
14 淡黄灰色土
15 小石を多く含む淡灰色砂礫
（暗渠埋土）

16 黒灰色砂混り土
17 黒褐色土
18 茶褐色土
19 黒茶褐色土
20 暗茶色粘土
21 暗灰色砂礫
22 暗灰橙色土
23 黒灰色土（シルトに近い）
24 橙褐色土
25 灰白色シルト
26 黄褐色粘質土
27 灰色シルト
28 灰色砂礫
29 黒色粘土
（1号溝埋土）

30 攪　乱
31 茶色粘質土
32 淡褐色粘質土
33 黄褐色粘質土（地山）
34 黄色粘質土
35 灰褐色粘質土
36 黄色味を帯びた青灰色粘質土
37 青灰色粘質土
38 黄褐色粘質土（マンガンを含む）
39 青灰色砂質土
40 黄褐色粘質土（黒褐色粘質土を含む）
41 灰白色粘質土
42 明灰白粘質土
43 暗青灰色粘質土

Fig.37　土層断面図

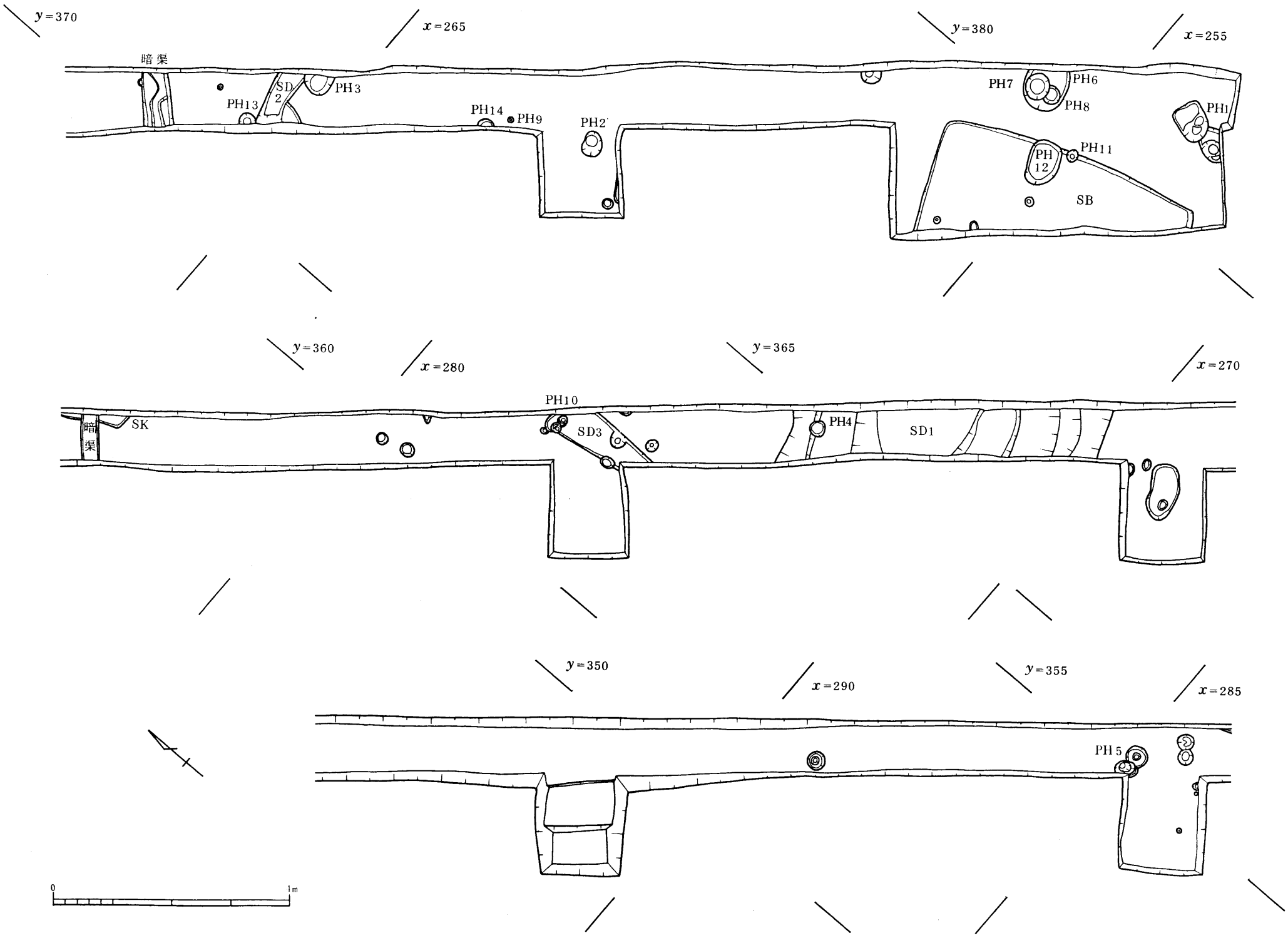
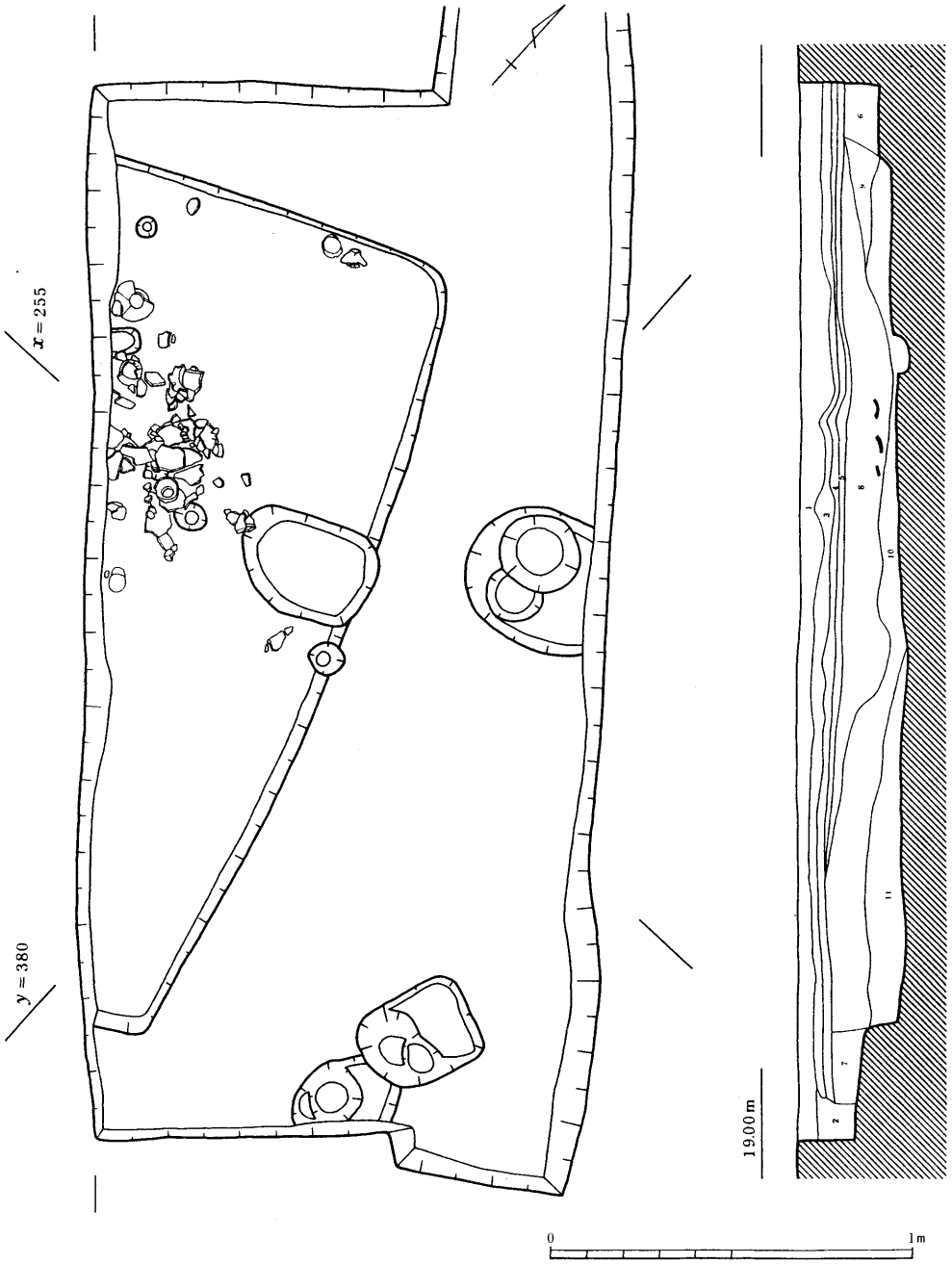
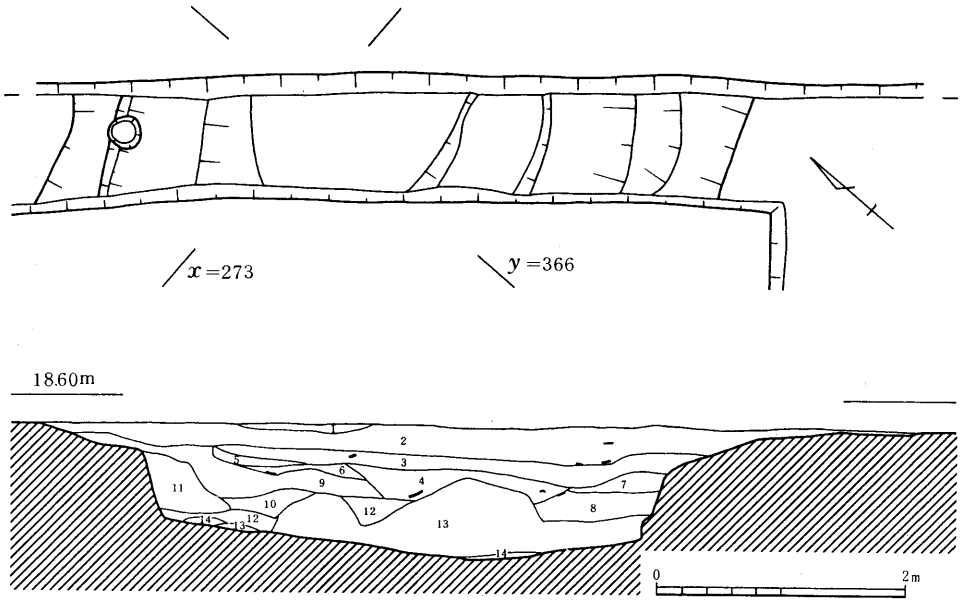

y=370
x=265
y=380
x=255
暗渠
PH13
SD 2
PH3
PH14
PH9
PH2
PH7
PH6
PH8
PH1
PH 12
PH11
SB
y=360
x=280
y=365
x=270
PH10
暗渠
SK
SD3
PH4
SD1
y=350
x=290
y=355
x=285
PH 5
0
1m

Fig.38　遺構配置図



1　表土　2　撹乱　3　灰褐色粘質土　4　黄褐色粘質土　5　暗灰橙色粘質土
6　暗黒褐色粘質土　7　暗褐色粘質土　8　黒褐色粘質土　9　暗灰褐色砂質土
10　暗褐色粘質土　11　暗褐色粘質土（砂礫混り）

Fig.39　竪穴式住居跡



1 黒灰色砂混り土	2 黒褐色土	3 茶褐色土	4 黒茶褐色土	5 暗茶色粘土
6 暗灰色砂礫	7 暗灰橙色土	8 黒灰色土（シルトに近い）	9 橙褐色土	
10 灰白色シルト	11 黄褐色粘質土	12灰色シルト	13 灰色砂礫	14 黒色粘土

Fig.40 SD 1

(2) 溝状遺構

SD 1（Fig.40 PL.32）

トレンチ南半部中程、南東端より約22 m北西の x ＝273、y ＝366付近に位置する。上面幅5.50 m、底面幅3.82 m、深さ1.10 mを測り、西北西―東南東にかけて走向するとみられる。上半部はゆるやかに下降するが、途中で垂直気味に落ち込み底面へ達する。埋土はトレンチ北側壁面での土層を観察すると14層に区分される。第 3 層以下は複雑な堆積状況を示しており、埋土土質および出土遺物から勘案すると比較的短時間に埋没したと考えられる。

SD 2（Fig.38 PL.33(1)）

調査区域南東端より北西側約16 m、x ＝266、y ＝372付近に位置する。PH 3 、PH13によって切られている。幅36～40㎝、深さ 5 ㎝程度の小規模のもので底は、東から西へ向かってわずかな傾斜面を呈する。埋土は風化礫を若干含む暗黒褐色粘質土の単一層。出土

遺物は弥生土器の小破片が数点。

SD 3（Fig.38　PL.33(2)）

SD 1 の北西約 3 m、x ＝276.5、y ＝362.5付近に位置しており、周辺のピットを切っている。幅62cmを測り、流路は南北方向である。片段の溝で深さは北側で約 7 cm、南側で約12cmを測る。北西側の肩部は内方に彎曲しており、北東側の肩と連続して長細い形状の土壙となる可能性もある。埋土は暗茶褐色粘質土の単一層で、弥生土器片数点が出土した。

(3)　土壙（Fig.38）

SD 1 の北西約 5 m に位置し、2 号暗渠によって切られている。遺構は調査区外にも拡がっているため全体の形状、規模等は不明である。深さは約 4 cm程度で浅い。埋土は暗茶褐色粘質土で、出土遺物は無い。

(4)　柱穴（Fig.38）

柱穴等の掘り込みは総数39個検出した。柱穴は埋土により暗茶褐色粘質土のもの、暗黒褐色粘質土のもの、および明黒褐色粘質土のものに区分できる。SD 1 以北には暗茶褐色粘質土のもの、SD 1 以南には明黒褐色粘質土のもの（PH 1 ・ 3 ・ 9 ・13・14）と暗黒褐色粘質土のもの（その他のもの）とが分布する。出土遺物が少ない。

（磯部・河村）

4　遺物

今回の調査で出土した遺物には弥生土器、土師器、石器がある。とりわけSD 1 からは弥生時代中期後半から後期初頭の土器、住居跡から古墳時代初頭の土師器がまとまって出土しており、発掘面積の狭小さにもかかわらず比較的良好な資料が得られた。

(1)　竪穴式住居跡出土遺物（Fig.41　PL.35）

出土土器の大半は第 8 層からで、中央付近に集積した状態で検出され、6 ・10のみ住居跡内東北隅付近から床面付着の状態で出土した。大半は弥生時代終末から古墳時代初頭のものであるが（ 1 ～14)、15～20は弥生時代前期から中期と推定されるもので流れ込みのものと考える。

1 ～ 4 は壷。1 は直口壷の口縁部で、頸部から直線的に立ち上がる。外面に刷毛目を施し、内面は器面磨滅のため不明。2 は口縁部片でナデ調整。3 は底部片で平底である。外面箆削りの後ナデ、内面箆削り。4 は小型丸底壷で口縁部を欠失する。外面横方向の箆削りの横ナデ、頸部直下に刷毛目が残る。内面胴部はナデ、内底面は細かな箆削りを行なう。

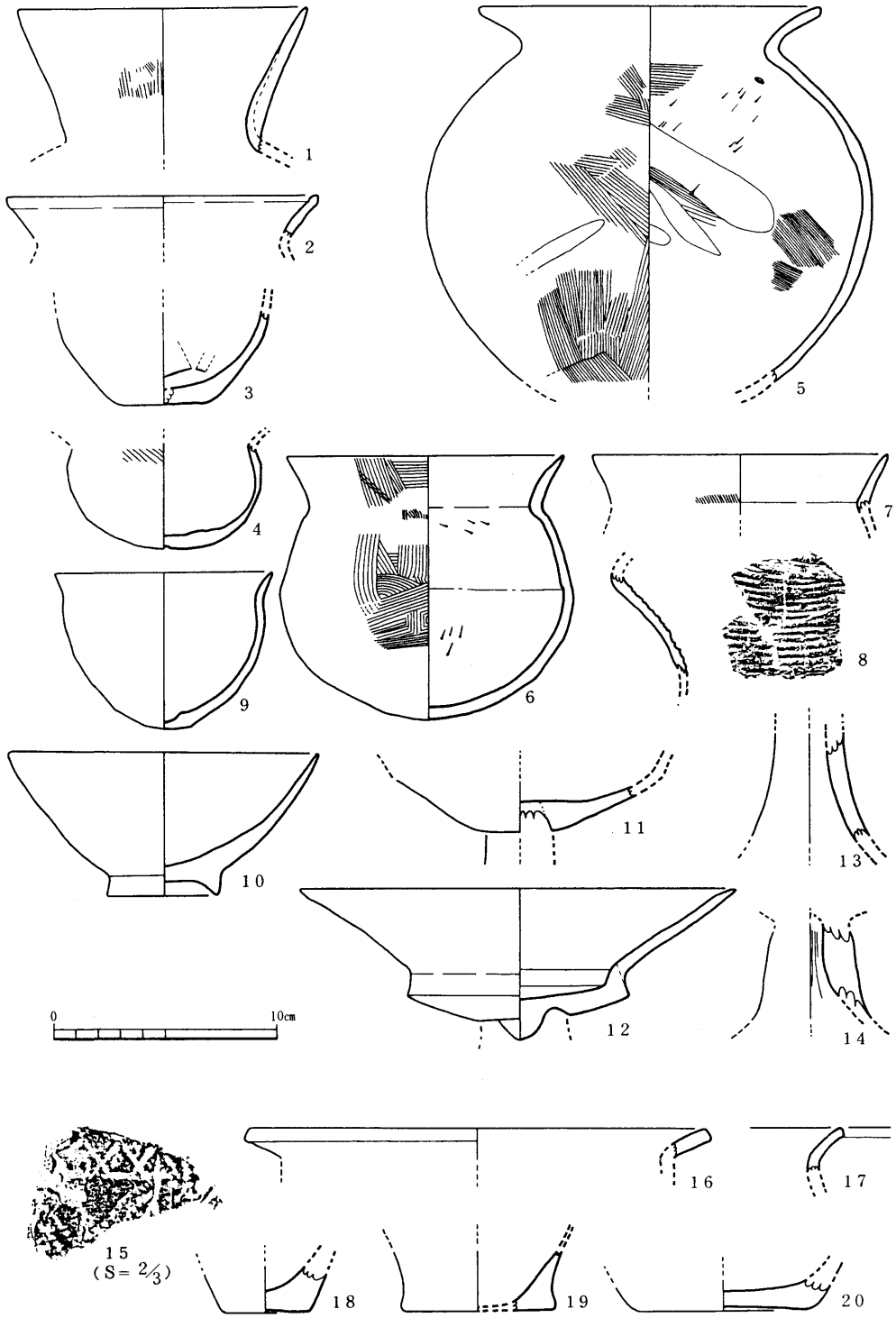


Fig.41　住居跡出土遺物

5～8は甕。口縁部を欠失する8以外は「く」の字状に外反する口縁をもつ。5は球形の胴部をもつもので底部を欠失する。外面刷毛目、内面刷毛目の後篦削りを施す。内面所々に指圧痕が残る。6は小型の甕で丸底。球形の胴部をもつ。外面刷毛目、内面粘土帯の継ぎ目が見られ、それを境に上位は横方向、下位は斜方向に篦削りを施す。7は器壁がやや薄く口縁端部が尖りぎみである。ナデ調整を施す。頸部には刷毛目が残る。8は胴部片で外面叩き目、内面ナデを施す。9・10は鉢。9は卵形の胴部に短く外反する口縁部をもつ。底部は平底ぎみで不安定。全面ナデで仕上げる。10は脚台をもち、体部がやや内彎ぎみに立ち上がる。器面荒れが著しく、脚台にわずか指圧痕が残るほかは調整不明。11～14は高坏。11は坏底部のみの破片で器面磨滅のため調整不明。12は坏身が底部から二段の屈曲をもち口縁部が大きく開く。器面磨滅のため調整不明。13は裾がゆるやかに広がるもので調整は不明。14は脚下部が裾で水平に折れ曲るものと思われる。外面ナデ、内面には絞り痕が見られる。

15は貝殻腹縁による斜格子文と木葉文を施す。16・17は甕の口縁部片である。18～20は底部片で上げ底状のもの（18・20）と平底のもの（19）がある。18・19は器面磨滅のため調整不明。20はナデを施す。

(2)　溝状遺構

SD 1 出土遺物

出土遺物は埋土の位置によって上層（第1・2層）、中層（第3～12層）、下層（第13・14層）と3区分した。なお、中層のうち上位の層では若干時期の異なる土器が出土したため、この一群を別にして取り上げた。

上層出土遺物（Fig.42　PL.35）

21は朝顔型に開く口縁部をもつ壷で、端部は下端がやや下垂し、上端は上方に伸び、複合口縁状になる。口縁端部には円形浮文を貼り付ける。器面荒れのため調整不明。22は「く」の字に外反する壷の口縁部。全面刷毛目の後ナデを施す。23は壷の胴部片で刺突文を刻む。24は壷の胴上部片。断面三角形の突帯を三条巡らす。25～33は「く」の字に外反する口縁部をもつ甕。胴部の張りが弱く最大径が口径を上回らないもの（25～29）と張りが強く口径を上回るもの（30～33）がある。29は端部をつまみ上げる。30は肥厚した口縁部に二条の沈線を施す。25・33は器面磨滅のため調整不明。他は口縁部内外面に横ナデを施す。27の頸部内面は磨き、28は口縁端部内面を篦で押えて跳ね上げ状にする。32の頸部内面には刷毛目が残る。

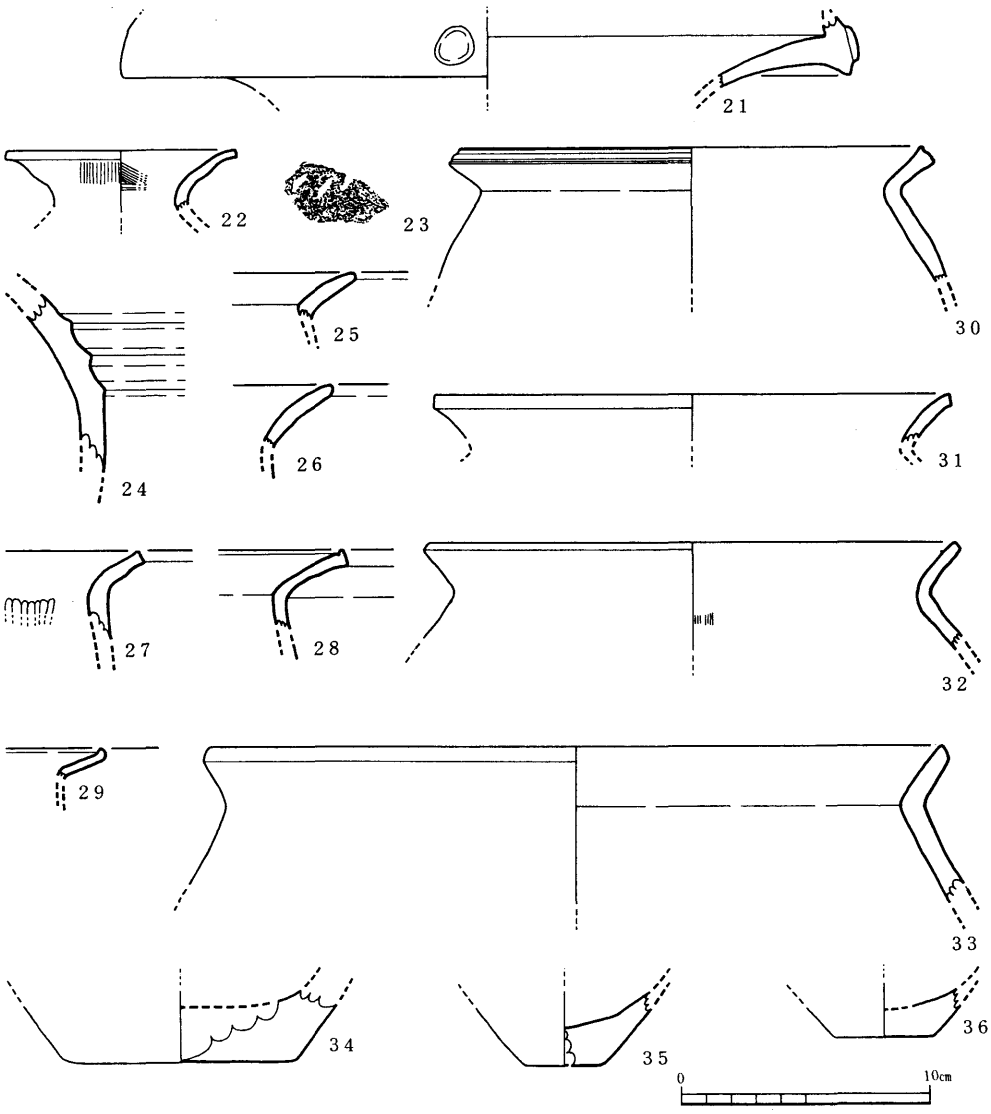


Fig.42　SD1 上層出土遺物

中層出土遺物（Fig.43～45　PL.35～37）

土器

37～40は壷。37は「く」の字に外反するもので口縁端部がわずかに肥厚する。端部よりやや下位に紐通しの小孔を穿つ。内外面ともナデ仕上げ。38は直立する短い頸部に強く屈曲し外反する口縁部をもつ。口縁端部外面は窪み、内面は上方へ肥厚する。全面ナデ仕上げ。39は口縁部が短くゆるやかに外反するもので、肥厚した端部の外面には一条の沈線を

巡らす。全面ナデ仕上げ。40は直線的に外方に開く長頸壷の口縁部。端部はやや窪む。口縁部は横ナデ、以下外面は縦方向の篦磨き、内面ナデを施す。41～51は「く」の字に外反する口縁をもつ甕。短く外反する口縁部をもち胴部の張りが強く口径を上回るもの（43・47・49・50）と最大径が口径を上回らないもの（48）がある。43は口縁部が強く屈曲して外反し、端部外面に3条の篦描き沈線が巡る。44は口縁端部が窪む。51は厚手の小型の甕で口縁端部は尖りぎみにおさめる。43は口縁端部内面に篦による押圧痕が残る。胴部外面は粗い刷毛目、内面はナデ。47～50の胴部は器面磨滅のため不明。51は全面的に丁寧な仕上げで外面および口縁部内外面は刷毛目の後ナデ、胴部内面はナデ調整。52～55は底部。52～54はわずかな上げ底、55は平底である。52は内外面ともナデ仕上げ。53～55は外面刷毛目の後ナデ、内面ナデにより仕上げており、52・55の内底面に指圧痕、53の内面には篦削り痕が残る。56～58は高坏の脚部。58は中空の部分が少ない。いずれも内面に絞り痕が見られるが、器面磨滅のため調整不明。

59・60は砥石である。59は円礫を素材とし、使用頻度が高く正面中央部が大きく窪む。研砥は正面と背面の一部、両側面の四面を使用。研砥方向は左上がりに斜交、両側面は縦方向。荒砥である。残存長13.1cm、幅10.6cm、厚さ5.9cm、重量1,082.0g。折損品である。60は小形のもので仕上げ砥である。正背両面と上面の一部を研砥面として使用する。研砥方向は正面左上がり、背面縦方向で、どちらも斜交して用いる。長さ8.2cm、幅9.0cm、厚さ3.2cm、重量275.0g。

61～72は上述した中層上位のもの。61～63は壷の口縁部。61は頸部から朝顔形に大きく開くもので、口縁端部は丸くおさまる。ナデ調整。62・63は小型の壷。62は「く」の字に外反するもので外面斜め方向、内面横方向の刷毛目調整を行なった後、口縁端部をナデている。63は複合口縁壷の口縁部で口縁上段部を欠失する。器面磨滅のため調整不明。64～68は甕。64～66は口縁部が水平に近く折れ曲る。68は薄手でやや上げ底の底部に張りの少ない胴部をもち、口縁部は「く」の字に外反する。端部内面はやや上方へもち上がる。いずれも口縁部内外面は横ナデ仕上げ。65は外面縦刷毛、66は頸部内面篦削り。68は胴部外面縦方向の刷毛目、底部内外面がナデ。底部内面に指圧痕、口縁端部下外面には篦による押圧痕が残る。69・70は底部。69は上げ底の壷の底部で外面縦方向の刷毛目、側面顕著なナデ。内面はナデ仕上げで指圧痕が残る。70は平底で器面磨滅のため調整不明。71・72は高坏の坏部片で坏底部から屈曲して外反する口縁部に至るもの。両者ともにナデ調整を施す。

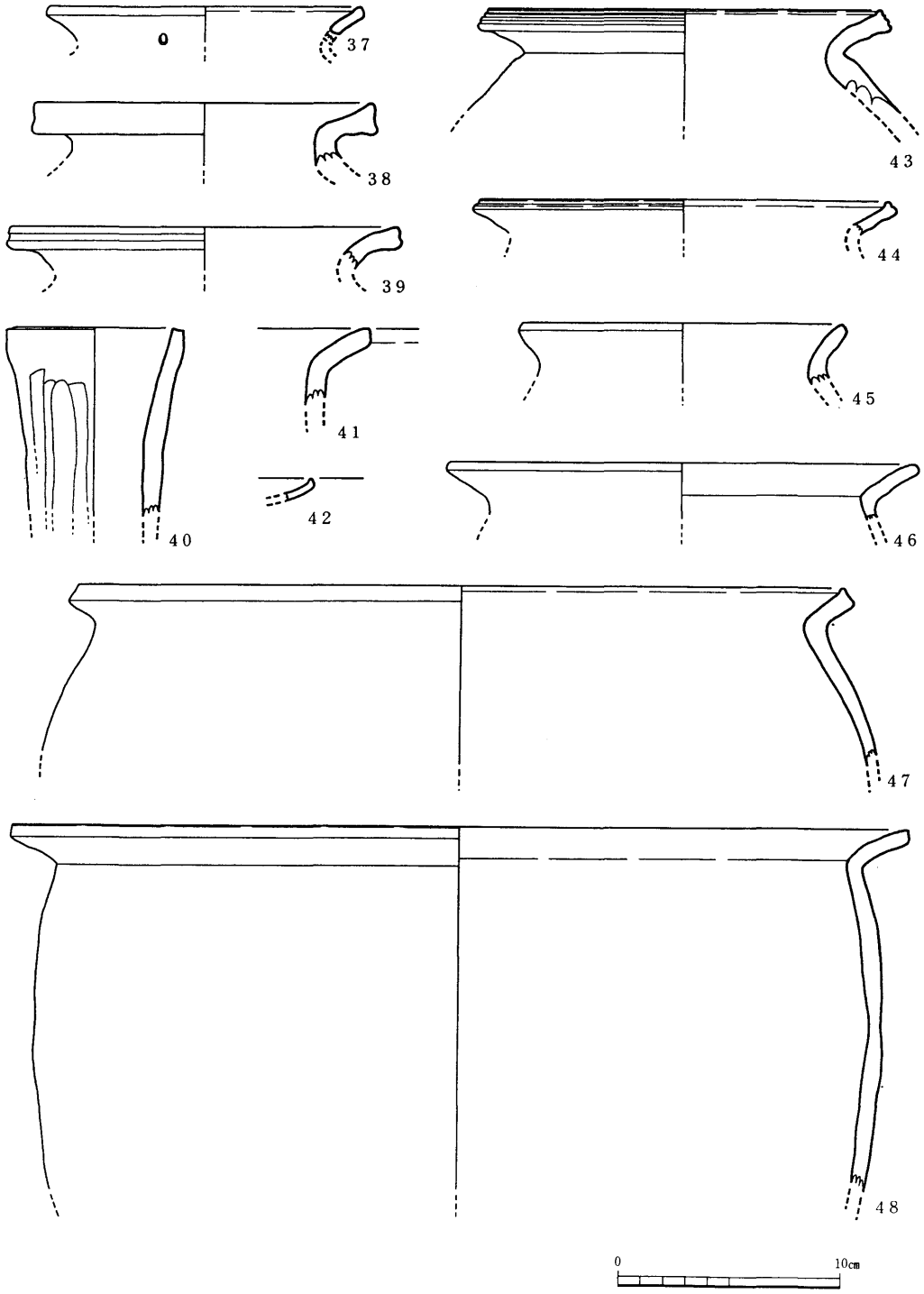


Fig.43　SD１中層出土遺物（１）

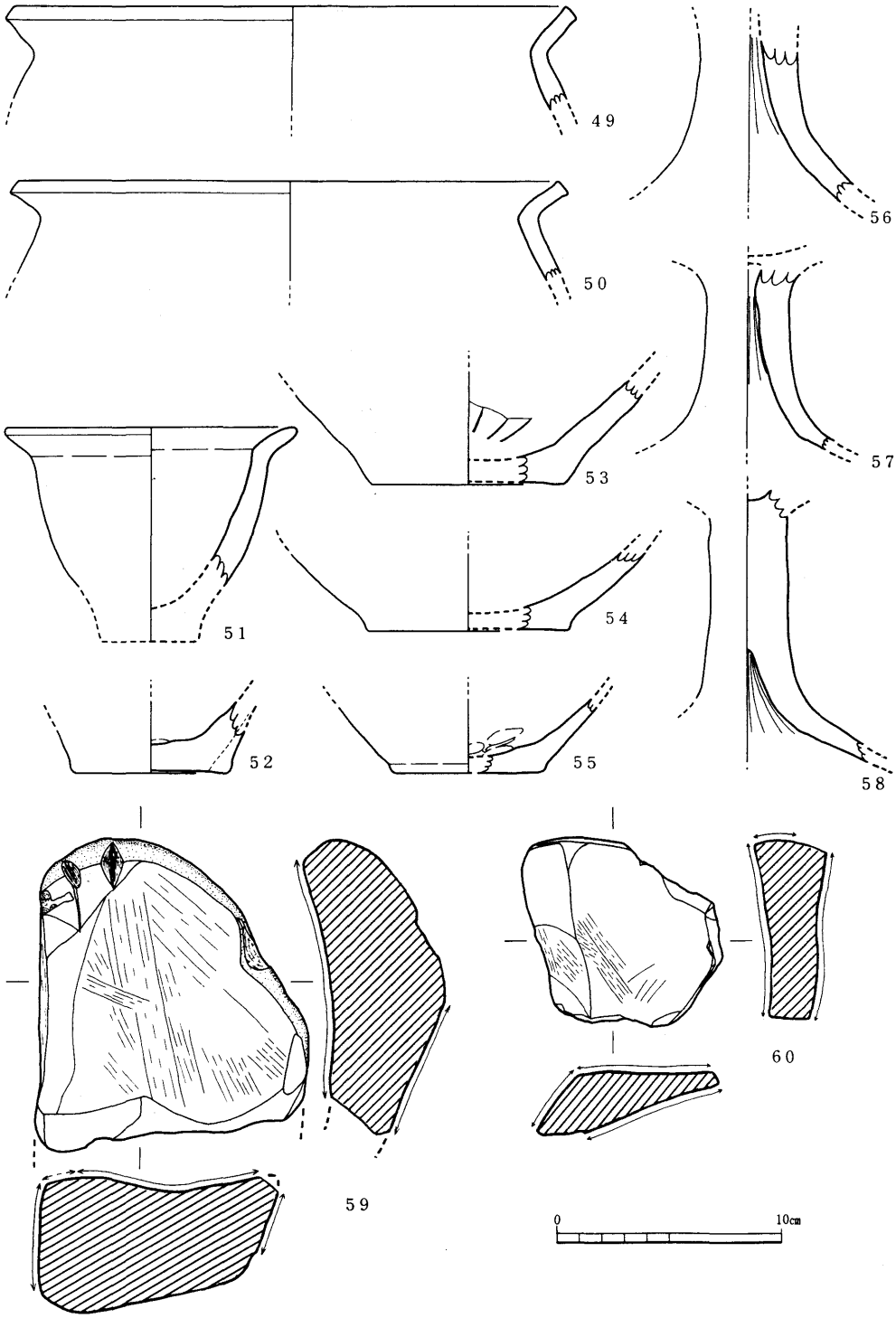


Fig.44　SD１中層出土遺物（２）

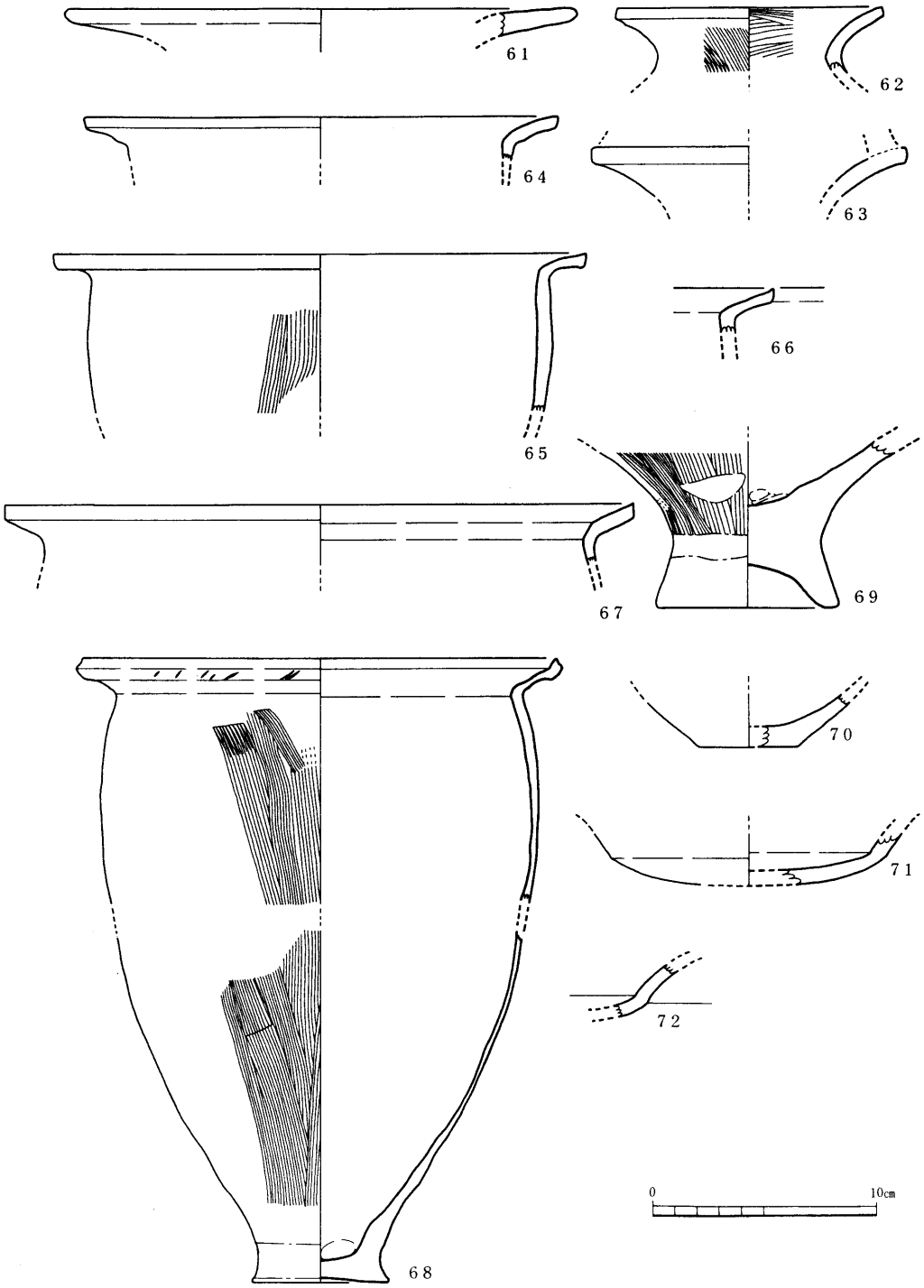


Fig.45　SD1中層出土遺物（3）

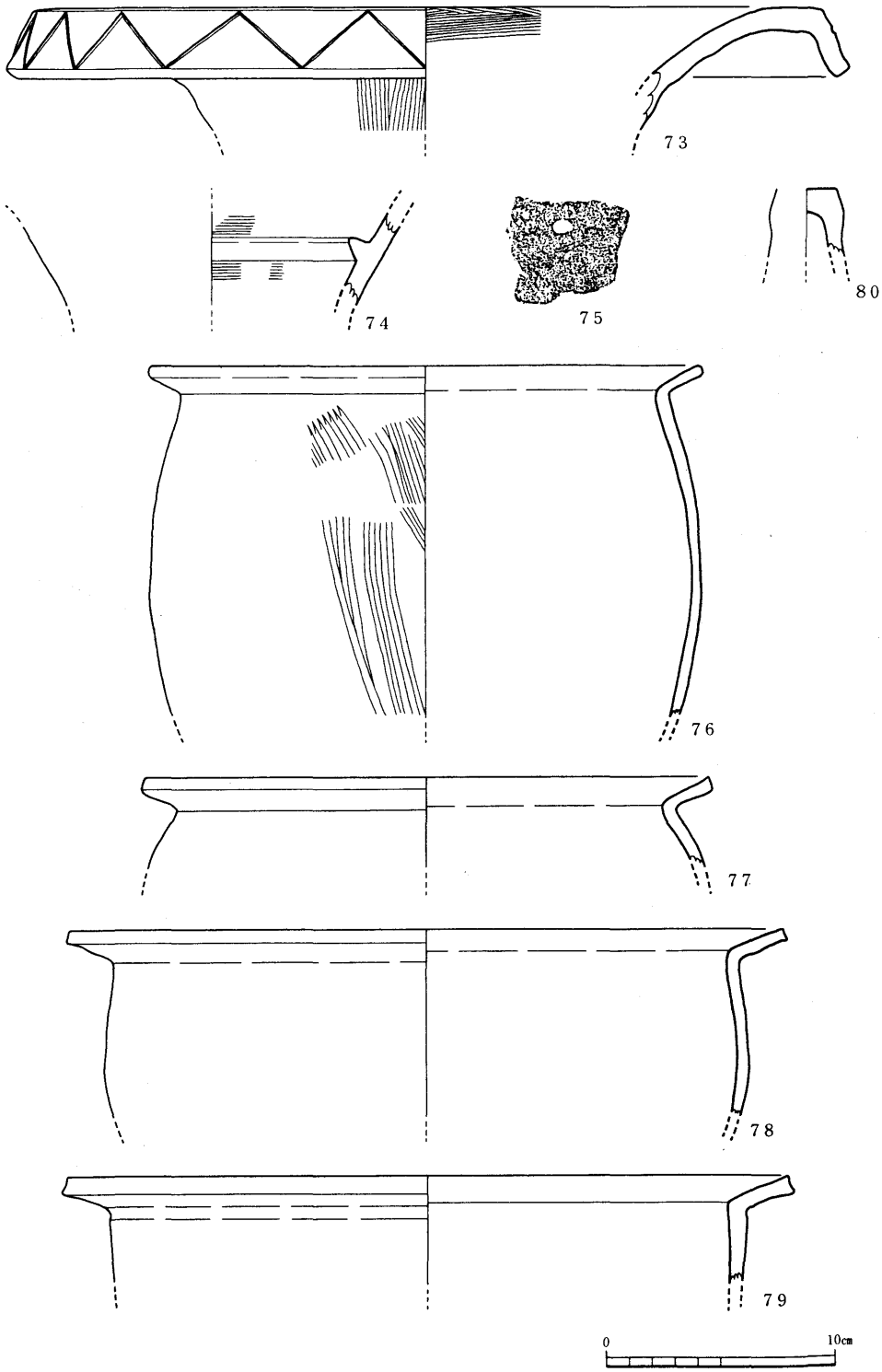


Fig.46　SD1 下層出土遺物

SD 1 下層出土遺物（Fig.46　PL.37）

73～75は壷。73は朝顔形に開く口縁の端部が下垂し、外面に刷毛原体押圧による鋸歯文を施す。外面縦方向、内面横方向に刷毛目を施した後、内面下半にナデを施す。74は頸部で、内面に断面三角形の突帯を貼り付ける。外面および突帯はナデ、他は刷毛目調整。76～79は口縁部が「く」の字に短く外反する甕。いずれも口縁部内外面はナデ。胴部外面は76が粗い刷毛目、77・79がナデ、78が刷毛目の後ナデを施す。80は高坏の脚部片。器面磨滅のため調整不明。

SD 2 出土遺物（Fig.47, 81）

甕の口縁部。わずかに肥厚する端部外面に二条の沈線が巡る。内外面ともナデ調整。

SD 3 出土遺物（Fig. 47, 82　PL.37）

外反する口縁部をもつ甕で、端部は丸くおさめる。外面縦方向の刷毛目、内面ナデ調整。

(3)　柱穴出土遺物（Fig. 47, 83～86　PL.37）

遺物が出土したのはPH 1～PH10である。いずれも細片で、図化できたのはPH 1（83）、PH 5（84）、PH 7（85）、PH 8（86）出土の5点である。83は壷、84・85は甕の口縁部。83は口縁端

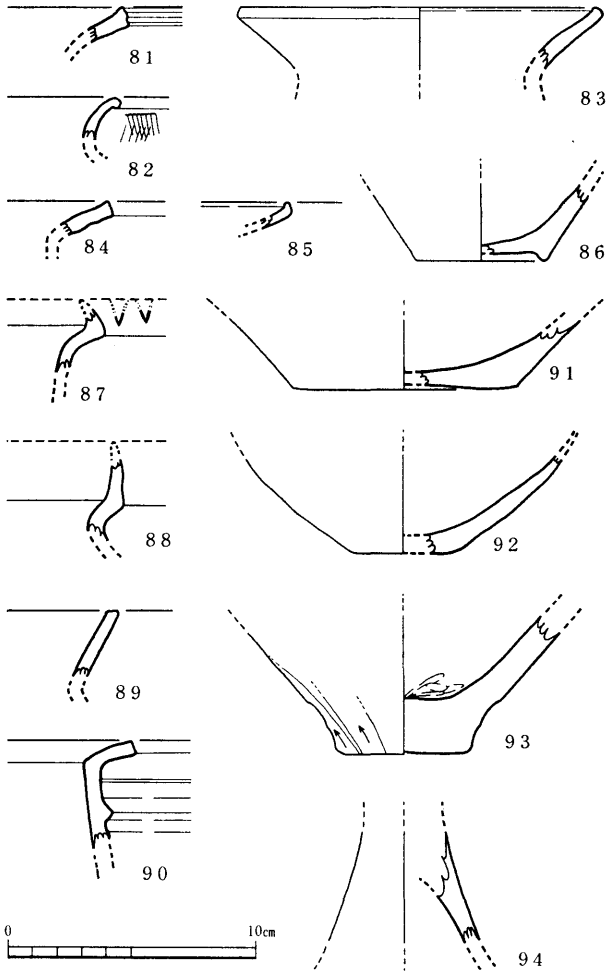


Fig.47　その他の遺構および包含層出土遺物
（81，SD 2　82，SD 3　83～86，柱穴　87～94，包含層）

部内面を内上方にわずかにつまみ出す。84は端部が平坦。85は端部内面を上方にわずかに引き出す。

(4)　包含層出土遺物（Fig.47, 87～94　PL.37）

87は口縁部があまり明瞭でない稜をもって屈曲する複合口縁に近い壷で、口縁部外面には箆描き鋸歯文を施す。内外面ともナデ調整を行なう。外面丹塗り。88～90は甕の口縁部。88は口縁部の屈曲が明瞭でほぼ直立して立ち上がる複合口縁甕。器面磨滅のため調整不明。89は直線的に開き、口縁端部はほぼ水平面をなす。ナデを施す。90は「く」の字に短く外反する口縁下に断面三角形の一条の突帯を巡らす。外面ナデ調整。91は壷、92・93は甕の底部。91は上げ底、92は底部が小さく丸底に近い。93は平底である。91・92は内外面ナデ仕上げ。93は外面箆削りの後ナデるが、ナデきれず底部平面は不整八角形をなす。内面はナデ仕上げで、指圧痕が残る。94は高坏脚部。ゆるやかに裾が広がるものと思われ、全面ナデ調整。外面各所に丹の痕跡が残る。

（磯　部）

Tab.14　出土遺物観察表（1）

図版番号	器　種	口　径（復原値）	器　高（現存高）	底　径（復原値）	色　　調	胎　　土	焼　成	備　　考
竪穴式住居跡								
1	直口壷	(13.0)	(6.5)		外面―橙色 内面―浅黄橙色	0.1～0.3cmの砂粒含む	やや軟	
2	壷		(4.2)		淡黄色	0.1cm程度の砂粒含む	良　好	
3	壷		(4.2)		灰白色	精良	良　好	
4	壷	(15.4)	(16.8)		外面―橙色 内面―灰黄色	0.1～0.5cmの砂粒含む	良　好	底部欠損
5	甕	(14.0)	(1.9)		乳灰褐色	精　良	良　好	
6	甕	(13.2)	(2.2)		外面―にぶい黄橙色 内面―灰白色	砂粒を含む	良　好	
7	甕		(2.0)		明黄褐色	精　良	やや軟	
8	甕	(20.2)	(1.4)		にぶい橙色	0.1～0.2cmの砂粒含む	良　好	
9	高　坏	19.6	(6.8)		外面―橙色 内面―乳灰色	0.1cm程度の砂粒含む	やや軟	脚部欠損
10	高　坏		(2.0)		外面―淡橙色 内面―灰白色	砂粒を若干含む	やや軟	口縁部および脚部欠損
11	高　坏		(4.9)		灰白色	精　良	やや軟	脚部破片
12	高　坏		(4.3)		外面―橙色 内面―灰白色	0.1cm程度の砂粒含む	良　好	脚部破片

Tab.15　出土遺物観察表（2）

図版番号	器　種	口　径（復原径）	器　高（現存高）	底　径（復原径）	色　　調	胎　　土	焼　成	備　　考
13	底　部		(2.1)	(4.0)	灰白色	0.1～0.4cmの砂粒含む	良　好	
14	底　部		(2.7)	(7.0)	外面―にぶい赤褐色 内面―橙色	極めて精良	やや軟	
15	底　部		(4.2)	(4.0)	灰白色	精　良	良　好	
16	底　部		(1.4)	(7.6)	外面―橙色 内面―にぶい赤褐色	砂粒多量に含む	良　好	
17	鉢	14.0	6.4	5.0	外面―橙灰白色 内面―橙灰色	0.1～0.2cmの砂粒含む	良　好	ほぼ完形
18	小　型 丸底甕	12.5	11.8		外面―上:灰色,下:黒褐色 内面―乳灰色	0.1～0.3cmの砂粒含む	良　好	口縁部・体部一部欠損
19	小　型 丸底壺		(4.7)		外面―灰白色 内面―浅黄橙色	精　良	良　好	口縁部を欠損すること
20	鉢	9.6	7.0	2.1	外面―灰色 内面…乳灰色	0.1～0.6cmの砂粒含む	良　好	ほぼ完形
SD1 上層								
21	壺		(2.9)		橙乳色	0.1～0.5cmの砂粒含む	やや軟	
22	壺	(9.4)	(2.5)		外面―茶褐色 内面―茶灰色	0.1～0.2cmの砂粒含む	良　好	
23	壺		—					
24	壺		(7.2)		外面―橙白灰色 内面―黄灰色	0.1～0.3cmの砂粒含む	良　好	
25	甕		(1.9)		乳白色	0.2～0.6cmの砂粒含む	やや軟	
26	甕		(2.6)		外面―乳褐色 内面―乳白色	砂粒多量に含む	やや軟	
27	甕		(3.6)		乳褐色	砂粒多量に含む	良　好	
28	甕		(3.2)		外面―橙灰色 内面―淡橙灰色	0.2～0.3cmの砂粒含む	良　好	
29	甕		(1.3)		橙　色	0.1～0.3cmの砂粒含む	やや軟	
30	甕	(18.4)	(5.4)		橙灰色	微砂粒を含む	良　好	
31	甕	(20.8)	(2.0)		褐　色	0.1～0.3cmの砂粒含む	良　好	
32	甕	(21.1)	(3.8)		外面―乳褐色 内面―乳白色	0.1～0.4cmの砂粒含む	良　好	
33	甕	(29.4)	(6.3)		橙　色	0.2～0.4cmの砂粒含む	やや軟	
34			(2.9)	(9.2)	乳白色	0.1～0.6cmの砂粒含む	良　好	
35			(3.0)	(2.8)	外面―橙色 内面―黒灰色	0.1～0.4cmの砂粒含む	やや軟	
36			(2.0)	(3.8)	外面―乳灰色,底部は黒色 内面―乳灰色	0.1～0.6cmの砂粒含む	やや軟	
SD1 中層								
37	壺	(11.9)	(1.6)		外面―灰白色 内面―乳灰色	精　良	良　好	
38	壺	(15.0)	(2.8)		乳灰色	0.1～0.5cmの砂粒含む	良　好	
39	壺	(17.4)	(1.9)		乳白色	0.1cm程度の砂粒を多量に含む	軟	
40	長頸壺	(7.0)	(8.4)		外面―橙色 内面―乳灰色	0.1～0.3cmの砂粒含む	良　好	丹塗り
41	甕		(3.4)		朱　色	0.1cm程度の砂粒含	軟	

Tab.16　出土遺物観察表（3）

図版番号	器　種	口　径（復原値）	器　高（現存高）	底　径（復原値）	色　　調	胎　　土	焼　成	備　　考
42	甕		(1.0)		外面—茶褐色 内面—灰褐色	精　良	良　好	
43	甕	(17.4)	(5.6)		外面—灰褐色 内面—乳灰色	0.1～0.7cmの砂粒含	良　好	
44	甕	(18.0)	(1.5)		外面—茶褐色 内面—乳灰色	精　良	良　好	
45	甕	(14.3)	(2.7)		灰褐色	0.1～0.2cmの砂粒含	良　好	
46	甕	(20.8)	(2.5)		外面—灰褐色 内面—乳灰色	0.1～0.4cmの砂粒含	やや軟	
47	甕	(34.0)	(7.9)		外面—橙灰色 内面—乳白灰色	0.1～0.3cmの砂粒含	やや軟	
48	甕	(39.8)	(16.1)		外面—灰褐色 内面—乳灰褐色	0.1～0.4cmの砂粒含	良　好	
49	甕	(24.3)	(5.6)		黄白灰色	0.1～0.5cmの砂粒含	良　好	
50	甕	(24.1)	(4.4)		外面—乳灰褐色 内面—灰白色	0.1cm程度の砂粒含	やや軟	
51	小型甕	(12.6)	(7.0)		外面—橙灰色 内面—黒灰色	0.1～0.3cmの砂粒含	良　好	
52			(3.2)	(6.8)	外面—橙色 内面—黒灰色	0.1～0.2cmの砂粒含	やや軟	
53			(5.0)	(8.6)	灰褐色	0.1～0.2cmの砂粒含	良　好	
54			(3.4)	(9.1)	乳灰色	0.1cm程度の砂粒含	良　好	
55			(3.3)	(7.0)	外面—灰褐色 内面—茶褐色	砂粒を若干含	良　好	
56	高　坏		(7.5)		乳白灰色	0.2～0.5cmの砂粒含	やや軟	
57	高　坏		(8.0)		乳灰色	0.1～0.5cmの砂粒含	良　好	
58	高　坏		(12.1)		乳白灰色	砂粒を多量に含	良　好	
61	壷	(22.4)	(1.3)		外面—乳白色 内面—乳灰白色	0.1cm程度の砂粒含	良　好	
62	壷	(11.9)	(2.9)		外面—乳灰褐色 内面—乳白灰色	0.1～0.3cmの砂粒含	良　好	
63	壷		(2.3)		朱　色	0.1～0.3cmの砂粒含	やや軟	
64	甕	(21.0)	(2.0)		橙灰褐色	0.1～0.3cmの砂粒含	やや軟	
65	甕	(23.7)	(7.1)		外面—茶褐色 内面—橙褐色	0.1～0.4cmの砂粒含	やや軟	
66	甕		(2.1)		外面—橙灰白色 内面—乳灰色	精　良	良　好	
67	甕	(28.0)	(2.8)		外面—茶褐色 内面—赤褐色	0.1～0.4cmの砂粒含	良　好	
68	甕	(21.0)	(26.7)	6.1	橙灰褐色	0.1～0.2cmの砂粒含	良　好	
69			(7.4)	(8.2)	乳褐色	精　良	良　好	
70			(2.4)	(4.4)	外面—灰白色 内面—黒灰色	0.1～0.3cmの砂粒含	やや軟	
71	高　坏		(2.8)		橙　色	精　良	軟	
72	高　坏		(2.6)		外面—橙灰白色 内面—橙白色	0.1～0.4cmの砂粒含	良　好	

Tab.17　出土遺物観察表（4）

図版番号	器　種	口　径（復原値）	器　高（現存値）	底　径（復原値）	色　　調	胎　　土	焼　成	備　　考
SD1 下層								
73	壷	（36.6）	（5.4）		外面―橙灰色 内面―乳灰色	0.1～0.2cmの砂粒含	良　好	口縁部片
74	壷		（4.0）		乳灰色	精　良	良　好	頸部片
76	甕	（23.9）	（15.3）		外面―乳灰褐色 内面―乳灰色	精　良	良　好	
77	甕	（24.6）	（3.9）		外面―乳褐色 内面―淡褐色	砂粒多量に含む	良　好	
78	甕	（31.2）	（8.1）		外面―上:橙褐色,下:黒褐色，内面―橙褐色	精　良	やや軟	
79	甕	（31.4）	（4.7）		外面―乳灰褐色 内面―橙褐色	精　良	良　好	
80	高　坏		（3.0）		橙　色	精　良	やや軟	脚部片
SD2								
81	甕		（1.4）		灰白色	0.1～0.3cmの砂粒含	良　好	
SD3								
82	甕		（1.7）		外面―黒褐色 内面―灰白色	砂粒を含む	良　好	
柱穴出土遺物								
83	壷	（13.8）	（2.5）		灰赤色	砂粒多量に含む	良　好	PH.1 出土
84	甕		（1.4）		黄橙色	砂粒多量に含む	良　好	PH.5 出土
85	甕		（1.1）		橙　色	精　良	良　好	PH.7 出土
86			（3.1）	（5.2）	外面―橙色 内面―赤黒色	0.2～0.4cmの砂粒含	良　好	PH.8 出土
包　含　層								
87	壷		（2.6）		乳白灰色 丹－赤褐色	精　良	良　好	外面に丹塗りの痕跡有り
88	甕		（3.1）		橙　色	精　良	やや軟	端部を欠損
89	甕		（2.7）		外面―灰黒色 内面―黒色	0.1cmの砂粒含	良　好	
90	甕		（4.4）		橙白灰色	0.1～0.2cmの砂粒含	良　好	頸下に突帯を有す
91			（2.8）	（9.2）	外面―浅黄橙色 内面―オリーブ黒色	0.1～0.2cmの砂粒含	良　好	
92			（4.0）	（3.8）	淡黄色	砂粒を含む	良　好	
93			（5.6）	（5.6）	外面―黄灰色 内面―灰色	砂粒を含む	良　好	
94	高　坏		（4.5）		乳白灰色	砂粒を含む	良　好	

5　小結

(1)遺構について

当調査区は吉田遺跡内の西部、大塚川による浸食面を臨む微高地の一角にあたる。

遺構の埋土は(1)暗茶褐色粘質土、(2)明黒褐色粘質土、(3)暗黒褐色粘質土のものが見られるが1号溝以北では(1)、以南では(2)、(3)が分布する。1号溝をみる限りでは黒褐色粘質土を埋土とする遺構は中期後半から後期初頭を上限とするものである。

主要な検出遺構について述べると、竪穴式住居跡は隅丸方形の平面プランを呈するものと思われ、時期は弥生時代終末から古墳時代初頭に属する。内部からは多量の土器類が出土したが、本来住居跡に伴うと思われるのは床面より出土の2点のみで（Fig.41，6・10)、他の大半は中央付近に集中して床面より浮いた状態で検出されており、一つに住居廃絶直後に土器捨場として意識的に投げ込まれたものと推測する。

1号溝は出土遺物から弥生時代中期後半から後期初頭に属すると考えるが、溝の性格、機能については竪穴式住居・土壙・溝等の存在が確認されていることから、集落に関連する蓋然性が高いと察するが、本溝の調査範囲が狭小なため現段階では可能性を指摘するにとどめ、今後の調査に期待したい。

(2)　出土遺物について

出土遺物の大半は土器類で、他には1号溝から石製品が2点出土した。とりわけ竪穴式住居跡出土遺物は県内の同時期のものとは異なった様相を示しており、それが一括資料として得られたのは大きな収穫である。竪穴式住居跡出土遺物を概観すると外面叩き目を有する土器片が出土するなど、畿内系土器の要素が強く感じられる。床面出土の鉢（Fig.41の10）は山口市湯田楠木町遺跡で類例が見られる[1]が、湯田楠木町出土のものは脚台が消滅して上げ底状になっており、今回出土のものよりもやや時期の下るものであるが、ともに後期において丸底化の進む県内では特異なものであろう。大阪府東奈良遺跡[2]や奈良県纒向遺跡[3]などに類例があり、畿内第5様式の系統とみる方が妥当であろう。また、坏身底部から2段の屈曲をもって広がる高坏（Fig.41，12）を同様、県内では防府市下右田遺跡に類例があるのみで[4]、畿内に多く類例がみられる。このタイプの土器は、例えば東奈良遺跡の土器編年では東奈良Ⅲ期[5]、纒向遺跡ではやや新相を示すものが3式期に位置づけられており[6]、庄内Ⅰ式期併行のものと思われる。したがって、住居跡が廃絶し、さらに可能性の一つとして土器捨場としての機能を果たしたのは上述の時期とさほど差はないと思われる。これらの土器は搬入品かあるいは模倣品かは不明だが、県内での当時の土器様相を知

る上で貴重な資料となりうると考える。

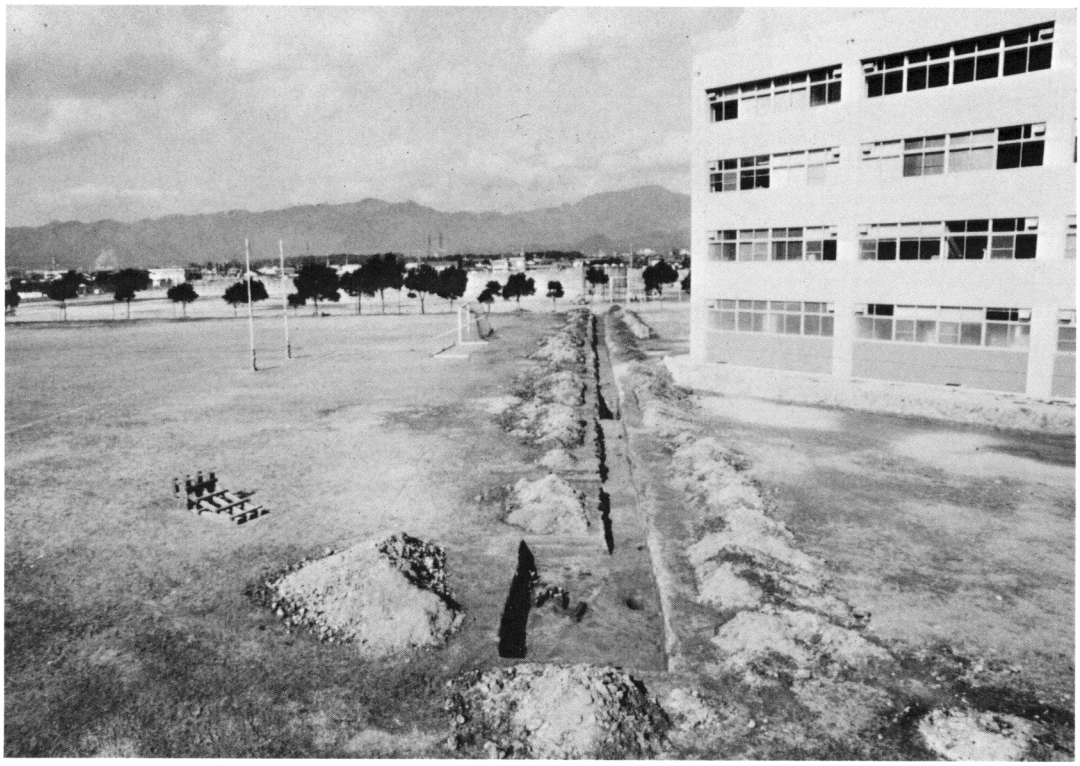
以上述べてきたように、今回の調査は吉田の地において弥生時代から古墳時代に生きた人々の生活の一端を垣間見たにすぎないが、検出された溝の目的・機能、周辺の住居跡群との関連性、さらに弥生時代から古墳時代への端境期における畿内系文化の流入過程および吉田遺跡における位置づけなど、集落形態、時間的推移を把握するための新たな幾つかの問題が提起されることとなった。

なお、今回の調査結果を含め、その地域には弥生時代から古墳時代にかけての集落関連遺構が密集して埋存しており、今後この周辺での工事に際しては十分な事前調査が必要と思われる。また、今回の工事に関連して、当初検出した竪穴式住居跡内には支線が付設される計画であったが、関連部局・業者の御協力と御理解の上、着工に際して一部施工内容を変更し住居跡部を迂回して頂き、本遺構は再び埋めもどされて保存されるにおよんだ。また、工事自体も最小限度の調査に留めたため発掘調査終了後引きつづき着工に入り、工期等に大きな支障もなく完成に至った。これらのことは、埋蔵文化財保護の立場と工事サイドの相互理解の上に成り立ったもので、今後構内において両者が共存していく上で意義のある事例となろう。

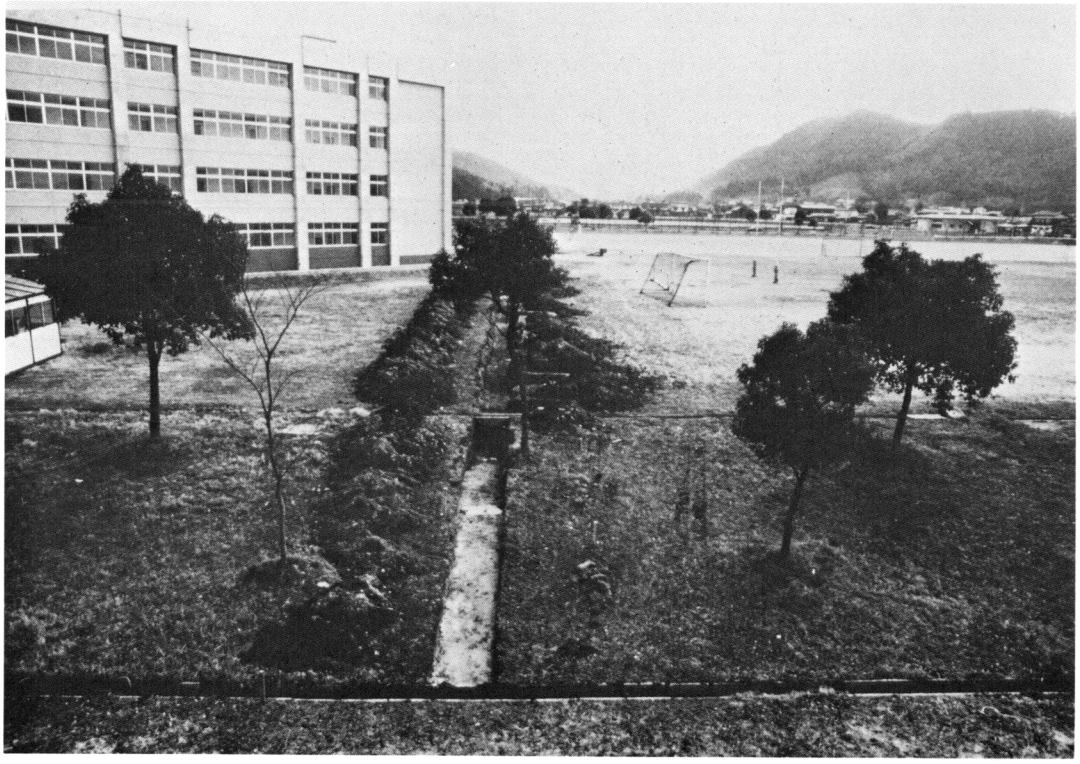
（磯　部）

〔注〕
1）山口市教育委員会『湯田楠木町遺跡第Ⅰ地区発掘調査概報』（1975年）。
2）東奈良遺跡調査会『東奈良遺跡発掘調査概報Ⅰ』（1975年）。
3）奈良県立橿原考古学研究所『纒向』（1976年）。
4）山口県教育委員会『下右田遺跡第3次調査概報』（1979年）。
5）注2）に同じ。
6）注3）に同じ。

吉田構内ラグビー場防球ネット設置に伴う発掘調査(1)



(1) 調査区全景（南東から）



(2) 調査区全景（北西から）

吉田構内ラグビー場防球ネット設置に伴う発掘調査(2)

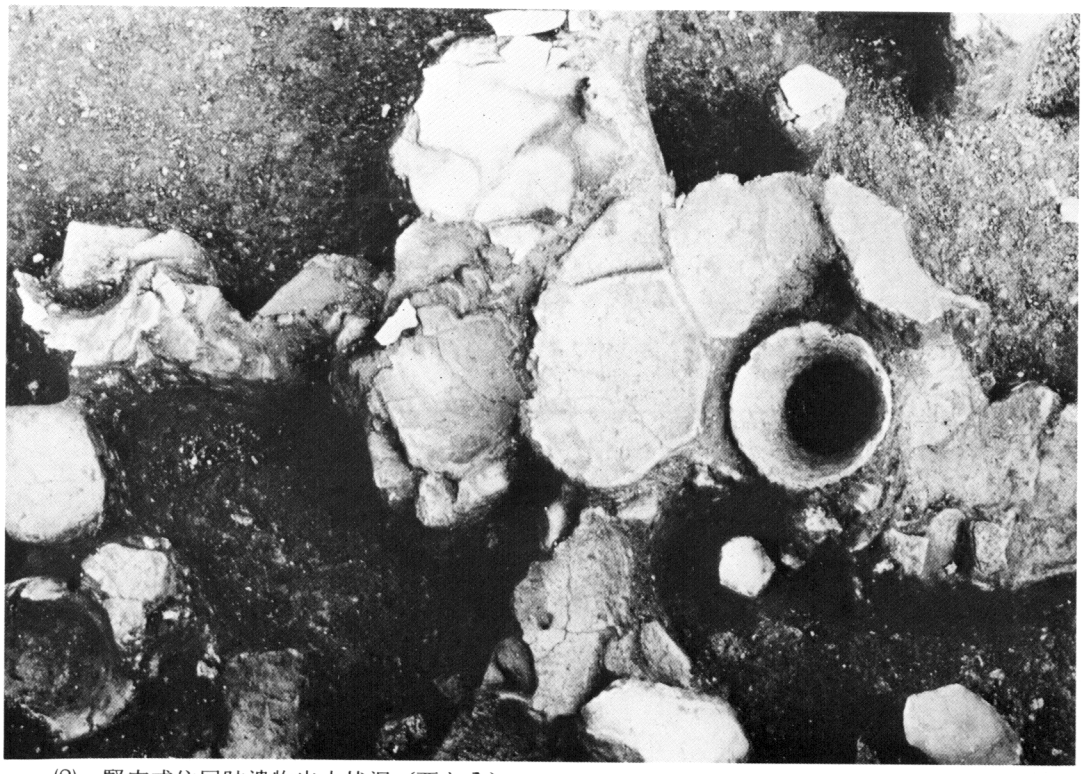
(1) トレンチ南半部全景（北西から）

(2) トレンチ北半部全景（南東から）

(3) 竪穴式住居跡（北東から）

吉田構内ラグビー場防球ネット設置に伴う発掘調査(3)

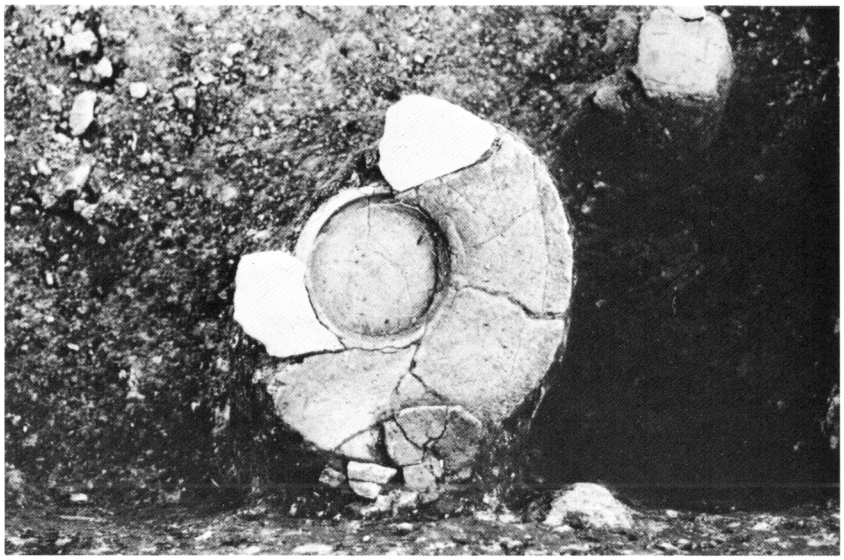
(1) 竪穴式住居跡遺物出土状況（東から）



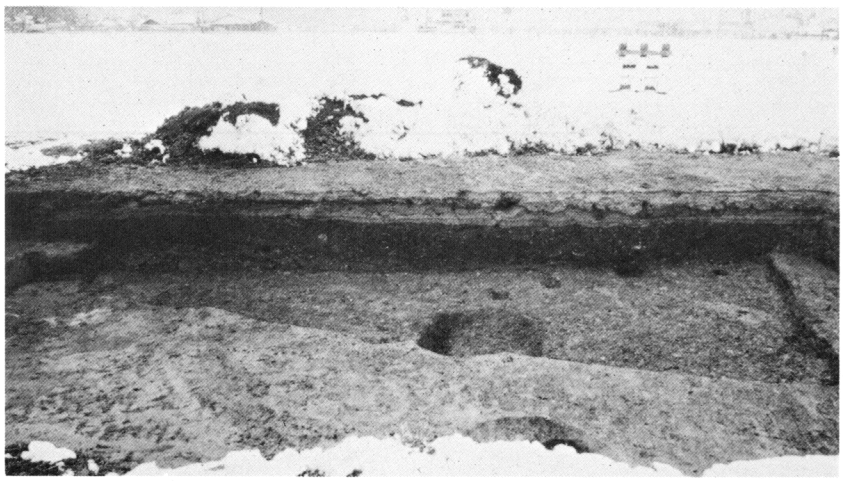
(2) 竪穴式住居跡遺物出土状況（西から）

吉田構内ラグビー場防球ネット設置に伴う発掘調査(4)

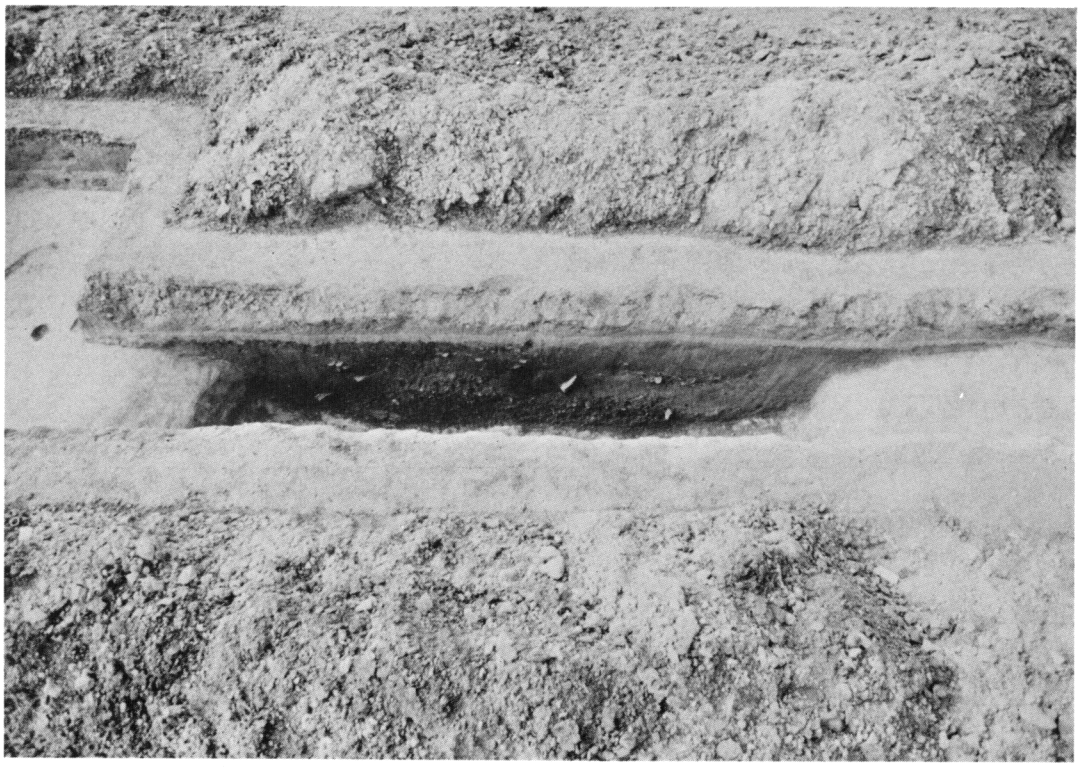
(1)
竪穴式住居跡
遺物出土状況
（北西から）



(2)
竪穴式住居跡
遺物出土状況
（南西から）



(3)
竪穴式住居跡
土層断面
（北東から）



(1)　SD 1（北東から）

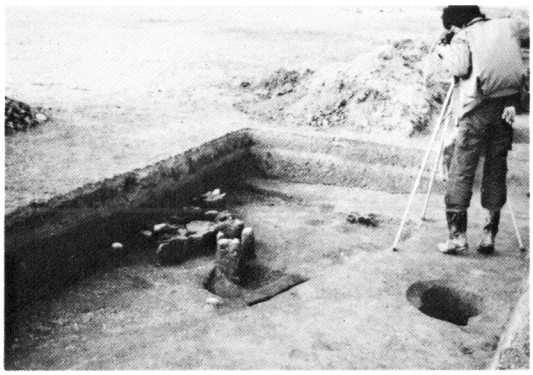
(2)　SD 1（北西から）

(1)　SD2（北東から）

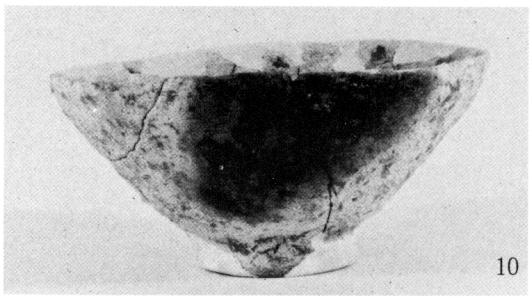
(2)　SD3（北西から）

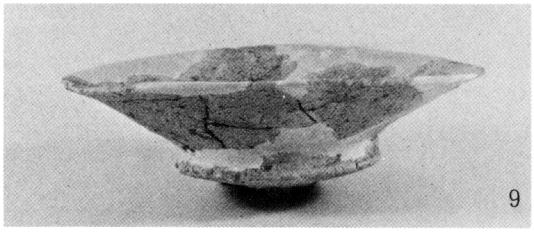
吉田構内ラグビー場防球ネット設置に伴う発掘調査(7)

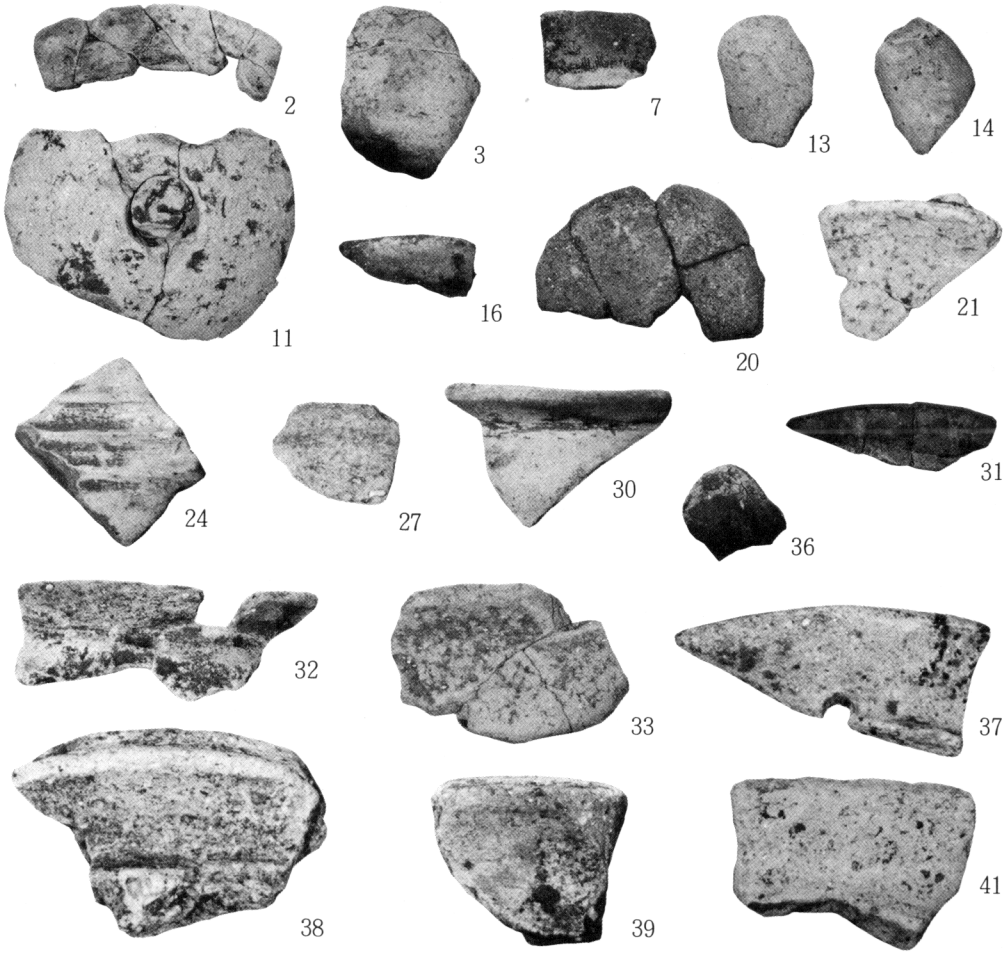
(1) 第3グリッド深掘西壁土層断面（北東から）



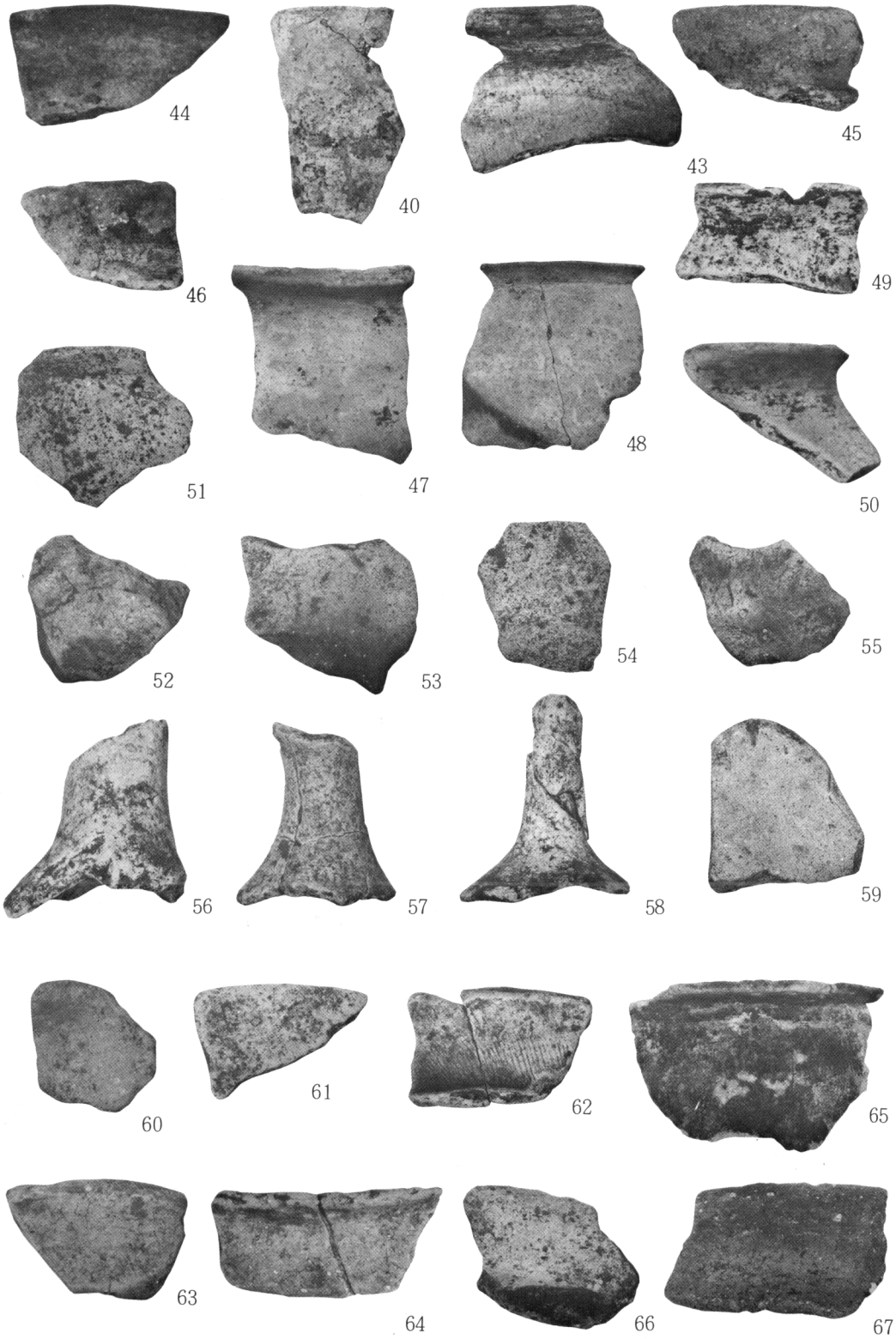
(2) 調査風景



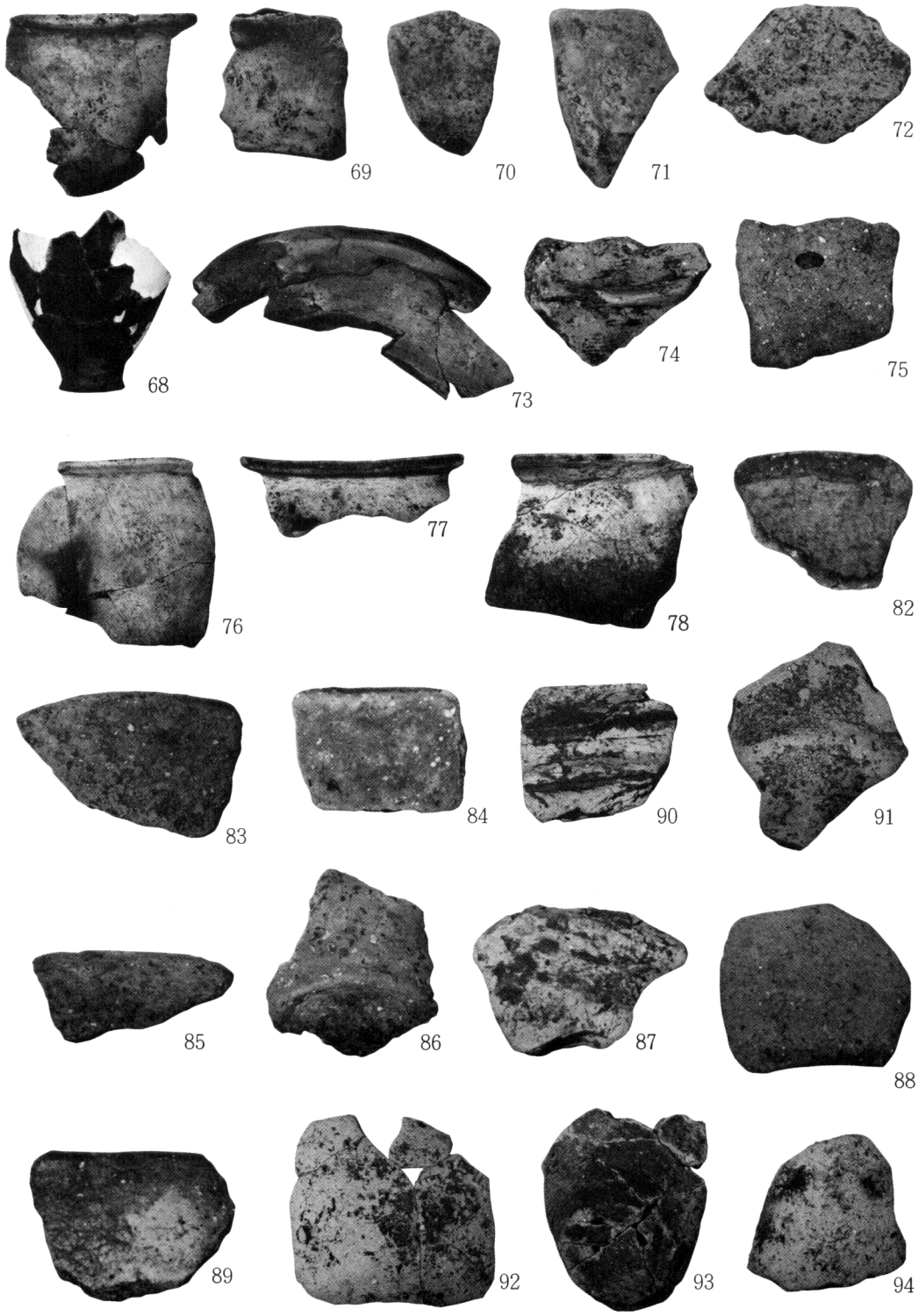




竪穴式住居跡出土土器（1～20），SD 1上層出土土器（21～36），SD1中層出土土器（37～41）



SD 1 中層出土土器・石器



SD 1 中層出土土器（68～72），SD 1 下層出土土器（73～78），その他の遺構および包含層出土土器（81～94）